人生《ストーリー》は終わらないっ！　　1

ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人生（ストーリー）は終わらないっ！　１

【Ｎコード】
Ｎ８０８０Ｙ

【作者名】
ひなた

【あらすじ】
『ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた……』
それは、かつて少年がテストの裏に書いた物語の序章。
時が経ち、彼はその物語の存在すら忘れていた。
しかし、彼は思わぬ形で忘れていた物語と再会する。

漢字テストの裏の序章

ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた。ぼくはそのネコに『ハク』という名前をつけた。初雪のように真っ白でやわらかくてサラサラしている毛が、あんまりにもキレイだったからだ。ハクは、すばしっこそうなスラリとした体に、いたずらっ子みたいなキラキラしたひとみをしていた。ぼくはハクの身の軽さや、ひとみのかがやきにとてもおどろいた。でも、ぼくが一番おどろいたのは、ハクの毛並みの白さでも、すばしっこさでも、ひとみのキラメキでもない。

ハクは人の言葉をしゃべるネコだったのだ。

1、喋る白ネコは跡を濁す　（1）

「これは何だ……？　……あぁ、数学のノートか。これはもう見たくないな。廃品回収行き……っと」
オレは手にしたノートをポイと放り投げた。くたびれた数学のノートは、緩い放物線を描いて部屋の隅に無事に着地した。
オレはノートの着地を見届け、小さくガッツポーズをした。よし、狙い通りだ。
「さて、次は……ん？　これは世界史のプリントか。……もうグシャグシャだな。これは廃品回収より……燃えるごみにした方が楽かな」
そうつぶやきながら机の横のゴミ袋を引き寄せて、世界史プリントを束ごと突っ込んだ。プリントは情けない音を立てて潰れる。こんなの先生が見たら泣くだろうなぁ。先生が苦労して作った3年間の授業プリントも、ゴミ袋の中じゃ惨めなもんだ。
「許せ、先生。オレの部屋の美化のためだ」
オレは慰めるように、ゴミ袋を2、3度叩いた。
「えーと次は……」
その時だ。オレの背後のドアが派手な音とともに、吹っ飛びそうな勢いで開かれた。このドアの開け方は――あぁ、アイツがおいでなさったか。
「ちょっと、海人（カイト）！　何をさっきからブツブツブツブツ！　うるさいわよ！」
女性特有のキンキンする高い声。いつものことながら、耳に突き刺さりそうなこの声は慣れない。オレはげんなりとドアの方に目を向ける。そこには仁王立ちになった大柄な女性のシルエットが1つ。まさに予想通り。オレは小さくため息をついた。
「ねーちゃん、勝手にオレの部屋に来るなよ」

そこにいるのはオレのねーちゃん――玉村（たまむら）　美波（ミナミ）。

幼いころからオレ達姉弟は、いろんな人に「姉弟なのに、全然似てないのね」って言われてきた。……うん。オレもそう思うよ。

小柄でひょろいオレと違って、ねーちゃんは背が高く大柄で、いつも声が大きい。なんでも、この体格と声で、学生時代はバレーボール部で重宝される選手だったそうだ。くりっとした大きな瞳をキラキラさせながら（オレがうんざりするぐらい）ねーちゃんは語っていた。

オレ達の唯一の共通点は、サラサラストレートの黒髪だけ。でも、それはもう過去の話。社会人になった今のねーちゃんの髪は、緩いウエーブのかかった茶色のショートヘアに変わってるから。

オレは18年間で1度も変わってない黒髪頭を掻いた。さて、どーやってねーちゃんに退出してもらおうか。

どうやら今、ねーちゃんのご機嫌はあまりよろしくないらしい。

ねーちゃんのくりっとした瞳が、きゅっと細くなってつり上がっている。よくない前触れ。おい、ねーちゃん。いつも「もっとパッチリした目がいい」ってグチってるじゃん。そんな目、やめた方がいいと思うよ。

でも、健気な弟の無言のアドバイスは届かなかった。

「で？　どれぐらい片付いたのよ？」

ねーちゃんは細くつり上がった瞳で、オレの部屋をずいっと見回した。一瞬、カチンとくるものがあったが、オレは1つため息をついて我慢することにした。こんな眼をした時のねーちゃんを阻止して、よかった例（ためし）がない。オレは学習する子なのだ。

部屋の状態は一言で例えるなら、……足の踏み場もないってとこだろうか。

床の上には、教科書の塔やマンガのタワーが、そこかしこに建築されている。今にも崩れそうな危うい状態だ。誰だよ、こんな危な

いものを建てたのは？　……あ、オレか。
ベッドの上には洗濯物がこんもりとした山を作っている。本来ならクローゼットに仕舞われるべきものなのだが、どうにも面倒くさいのだ。
勉強机の上は、ペンやらプリントやらファイルやらでいっぱいだ。ちょっとでもつついたら、あっという間に崩れてしまいそうだ。こんな状態でも崩れてないのが不思議だよな。まるで表面張力でも働いてるみたいだ。
「うーん、汚いままね。全然片付いてないわね」
ねーちゃんの言うように、全然片付いてない。……むしろ余計に汚くなったかな？　しかし、ねーちゃんの前でそれを認めるのは癪(しゃく)だ。
「しょうがないだろ。部屋の掃除と、荷物の整理と、下宿用の荷づくりと、いっぺんにしてるんだから……」
「あーもう！　ボソボソ言わない！　独り言多すぎ！　部屋の片づけぐらい静かにできないの？」
「それ、もう聞き飽きた。オレの独り言はクセなんだよ」
とりあえず、ねーちゃんはもうほっとこう。片づけ再開、再開。手近にあった生物の教科書を、数学のノートのそばに放り投げる。
「そんな調子でほんとに片付くの？　3日後には下宿先に引っ越すんでしょ？」
「あーもう、うっさいなぁ……」
「ってか、海人。これから1人暮らしなのに、ホントにやってけるの？　自分の部屋でさえこんな状態でさ」
「だから今片づけてるじゃんか。もう出てけって」
「……ハイハイ」
ねーちゃんは呆れたように言うと、部屋から出て行った。
やっと静かになった。オレは安堵のため息をついた。
「ちょっと休憩……」
オレは荒れきった部屋のフローリングにゴロンと横たわる。ねー

ちゃんの相手は疲れるのだ。
天井に反射するほのかに暖かい日の光が、静かになったオレの部屋をやわらかく照らし出している。窓の隙間から、庭の草花のかすかな匂いがする。窓の外は春爛漫ってところなんだろう。
そういえば、今朝のニュースのお天気おねーさんが『今日は絶好のお花見日和のお天気です』って言ってたな。
「――っても、今年の春休みはそんな暇ないけどな……」

ほんの2、3年前の春休みは友達とダラダラ過ごしたり、1人で本やらマンガやらを読んだりして、のんびりと過ごしていたっけな。でも、そんな日々は高校3年目に一変した。特に受験と卒業が近づくと、クラスの緊張感は一気に高まった。
「今思えばオレ、あんなピリピリした環境でよくやってけたよな……」
ともかく、オレは数週間前に無事に高校を卒業。進学先の大学も決まった。遅いながらも、今年も自由な春休みを謳歌……しているハズだった。
でも……
「……『3日後には下宿先でしょ』か。明日は家具の引っ越しだし……」
受験終了直後にこんなありさまだ。とてものんびりした春休み、という状態じゃない。

不意に、ねーちゃんのキンキン声が脳裏によみがえる。
『これから一人暮らしなのに、ホントにやってけるの？』
「ホント昔からおせっかいだなぁ……わざわざそんなこと言うなよ……」
オレはあと3日で、生まれてこの方18年間住み続けたこの家を出て、下宿暮らしを始める。通学には無理のある隣の県の大学に進

学するからだ。そんなわけで、この春休みはのんびり過ごす暇もなく、部屋の片付けやら、下宿の準備やらにいそしむ羽目になっている。『立つ鳥跡を濁さず』ってわけだ。

「しかしこの部屋の掃除……いつまでかかるんだろ……」

掃除作業のゴールが見えない。そりゃ3年間、ろくに掃除をしてなかったから、時間がかかるとは思ってたけど。さすがのオレも、朝から昼過ぎまでずーっと片づけをしてると、ウサもたまるってもんだ。

「……あぁもうっ！」

思わず振り上げたオレの拳が床を叩き、ドスっと音を立てる。

それが大きな間違いだった。

床に叩きつけられた拳は、オレの予想以上の衝撃を生み出したらしい。オレが「しまった」と思った瞬間にはもう、教科書の塔がぐらついていた。

く、崩れる！

塔が傾いていく。ただでさえ足の踏み場もない状態なのに、これ以上散らかると敵わない。オレは夢中で塔に手をのばす。

スローモーション。じれったい一瞬の後、オレの手が崩壊寸前の教科書の塔を支えた。よし！　これで塔の崩壊は阻止できたぞ！

その瞬間だった。

ドサドサドサドサ……それは頭の上に滝のように落ちて来るプリント。

オレの伸ばした手は塔を支えるにとどまらず、勉強机にも届いてしまっていたらしい。奇跡のようなバランスで均衡を保っていた机の上のプリントたちは、オレの手が激突した衝撃であっけなく崩壊した。

プリントの滝がおさまると、勉強机の上はずいぶんすっきりした。代わりに、部屋にはプリントの海が現れていた。所々に小島のよう

に教科書の塔やマンガタワーが頭を覗かせている。
さて、ここで問題。オレはどこから手をつければいいんでしょーか？
「とりあえずこっちはほっとこう……気を取り直してクローゼットから片づけるか……」
オレは勉強机に背を向けて、クローゼットの取っ手に手をかけた。思い切って一気にクローゼットを引き開ける。
これも間違いだったらしい。
声を上げる暇も無く、オレは突如現れたガラクタの雪崩に飲み込まれた。
……もう、オレにどうしろって言うんだ。

1、喋る白ネコは跡を濁す　（2）

机のまわりに散らばるプリントを海に例えるなら、クローゼットの中から溢れ出したゲーム機や服なんかのガラクタどもは堤防だろうか。プリント海の拡大を防ぐ堤防だ。

オレとしては、海も堤防も撤去したいんだけど。というか、海だけでも十分手に負えないのに、堤防まで出現するとは。状況は悪化するばかりだ。これじゃ掃除をしているのか、部屋を荒らしているのか自分でもわからない。

思わず深いため息が漏れた。もう独り言を言う元気もない。とはいえ、3日後には家を出る以上、片づけなくては。

「とりあえず、クローゼットの片づけ、片づけ……っと」

オレはガラクタ堤防を乗り越え、クローゼットに近づいて――盛大にくしゃみをした。

「うえぇぇ……すっげーホコリ……！」

自分のクローゼットながら、我慢の限界を超えるホコリの量だ。

とりあえず窓際へ撤退だ。鼻をかみ、2、3度深呼吸。新鮮な空気を十分に吸い込んで――オレは息を止めてクローゼットに首を突っ込んだ。

一度崩壊して、物が溢れ出したせいだろうか、クローゼットの中はわりとすっきりしている。（もちろん、クローゼットの外と比較してという条件付きで、だ）

「あれ……？　これ……」

オレはクローゼットの奥の方から1つの段ボール箱を引っ張り出した。それはどこから見てもごく普通の段ボール箱だ。多分、スーパーの「ご自由にお持ちください」コーナーから持ってきたんだろう。大きさは、幼稚園児が2人でお風呂ごっこができそうなぐらい。ふと目についたその段ボールにオレは……何か見覚えがある。

「もしかしてこれ……『ブラックホール』か？」

『ブラックホール』。

それは昔、オレがこの段ボール箱につけた名前だ。

捨てられないけど、普段は使わない物。捨てずに取っておかなければならない物。とりあえず見えない所に押しこめて置きたい物。そういったものを、オレはこのブラックホールに片づけている。まさに臭い物に蓋……といったかんじで。オレは普段、このブラックホールの存在には近づかないようにしている。というか、忘れたことにしている。あんまり直視したいものじゃないし。

とはいえ、これも片づけないと、きっと怒られるんだろうな。

オレは半ばヤケクソ気味にブラックホールの封印を解いた。

ブラックホールの中身は悲惨そのものだった。くしゃくしゃの文集。ぼろぼろのノート数冊。壊れたシャーペン。まだ使えそうなグローブ。子供用のスパイク。使いさしの絵筆。何のために捨てずにとってあるのかわからない物ばかりが、ブラックホールの中でごちゃまぜになっている。もはや、そのままゴミ箱として使ってもいいかもしれない。

「こいつも整理しろって？……骨より心が折れそうだよ……」

オレは絶望的な気分でブラックホールに手を突っ込んだ。やけっぱちで適当に手に触れた物をひっぱりだす。

現れたのはシワシワのプリントの束だった。オレはシワをのばしてプリントの束をめくり始めた。どうやら漢字テストの束らしい。問題の内容からして、小学生もしくは中学生の時のテストだろう。

「うあ、ひっで―点数ばっかだな」

１０点満点中のテストで２点やら４点やら、残念な点数ばかりである。うーん、ヒドイ。そして、点数もヒドイが間違い方もヒドイ。例えばコレ。『初雪』の読みを答えろ、という問題。オレの回答欄には『しょせつ』としっかりとした濃い文字。……自信満々に書い

てあるのが余計に恥ずかしい。
「あー……情けない……」
オレは逃げるようにそのテストを裏返した。
「あれ？　何だこれ？」
『しょせつ』テストの裏に何か書いてある。テスト用紙の裏の隅に隠れるように書いてある文字の列。小さいがテストと同じような、しっかりした濃い文字だ。
「なになに……『ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた』……？　なんだこりゃ？」
最初は日記かと思ったが、どうもそうじゃないらしい。最後まで読むと猛烈に恥ずかしくなった。コレ、オレが書いたのか？　……オレのテストの裏にあるんだから、きっとそうなんだろうな。これだからガキの想像ってのは……。
恥ずかしさに我慢できなくなったオレは『しょせつ』テストを乱暴にブラックホールに突っ込んだ。
「イテッ」
断っとくけど、これはオレの独り言じゃない。だってオレ、どこも痛くないし。
じゃ、痛いのは誰だ？　さっきの声はどこから聞こえた？　常識で考えると――
「ねーちゃんかな？」
今、この部屋にいるのはオレだけだ。つまり、この部屋で言葉を発するのは、オレとテレビぐらいしかいないはず。しかもテレビは現在オフのままだ。と、いうことは、さっきの声はこの部屋の外から聞こえてきたことになる。
「まったく、ねーちゃんこそ静かにしろっての。さて片づけ、片づけ……」
オレは再びブラックホールに手を突っ込んで、適当に中を探り始めた。
漢字テスト……文集……絵筆……。ガサガサと大げさな音を立て

ながら、いろんなガラクタが見えたり隠れたりをくり返す。まるでかくれんぼをしているみたいだ、なんて思ってると――

「イテッ」

またあの声だ！　オレは反射的にブラックホールから手を引っこ抜いた。

「なんだっ？」

オレの独り言の声が上ずっている。完全にビビってるぞ、オレ。でも、それもしょうがないと思う。さっきと同じ声が、オレのブラックホールの中から聞こえてくるんだから。これは聞き間違いや、空耳なんかじゃない。こんな至近距離から聞こえてくるんだぞ。間違えようがないじゃないか。

この中に一体何が入ってるんだ！？　オレはそーっとブラックホールを覗きこもうと、腰を落とす。

突然、ガタガタと脅すような音を立ててブラックホールが震えだした。まるで中身が大暴れしているみたいだ。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

オレは恥も外聞も捨てて大声で叫ぶと、ブラックホールから飛びのいた。

と、始まった時と同じように突然ブラックホールがピタリと動きを止めた。今まで大暴れしていたのがウソのようだ。

「……何なんだ……？」

オレはへっぴり腰でブラックホールに近づく。そして、再びブラックホールを覗きこもうとして――

「へぶっ！？」

オレは今まで出したことも無いようなうめき声を上げて、床にひっくり返った。

なにせ、白い毛の塊がいきなり顔面に直撃したんだぞ？　鼻は痛いし、視界が白い毛で埋まって何も見えないし、動物臭いし、たまったものではない。

「全く、自分の書いたものを粗末に扱いすぎではないか？」

偉そうな口調。ブラックホールから聞こえてきた、あの声だ。床にひっくり返ったオレの顔の上から聞こえてくる。
後頭部が痛い。鼻も痛い。顔じゅうに毛の塊が乗っかっていて息が苦しい。さっきから訳がわからないことばっかり。いろんなことが重なって、オレはイライラしていた。
「何なんださっきからぁぁぁぁぁぁ！」
オレは湧きあがってきたイライラを全部まとめて爆発させた。怒りの標的は顔面の毛の塊だ。オレは腕をのばして顔面の毛の塊を薙ぎ払った――つもりだった。
「ごふっ！？」
オレが拳を振るった瞬間、顔面から毛の塊は消えた。それはまさに一瞬の出来事。「しまった」と思う暇もなかった。オレの拳は毛の塊ではなく、オレの顔面に直撃してしまったのだ。
結果、オレは顔を手で覆って床の上で悶絶する羽目になった。もはや声をあげる元気もない。なにせさっきから二回連続で顔面に物が直撃しているんだから。
「たわけめ。いつからお前はそんな暴力少年になってしまったのだ？」
またあのエラそうな声が聞こえる。
「どうなんだ？　玉村（たまむら）　海人（カイト）」
知らない声に、フルネームで呼ばれた。顔面はまだ痛いけど、声の主がどうしても気になる。オレは上半身を起こし、声のした方に顔を向けた。
とたんにオレは絶句した。
初雪のように真っ白でやわらかくてサラサラしている毛。すばしっこそうなスラリとした体。いたずらっ子みたいなキラキラした瞳。眼の前にいるのはどう見ても――
「ね……ネコ？」
かすれたオレの声が、荒れた部屋にかすかに響いた。

1、喋る白ネコは跡を濁す　（3）

「ね……ネコ？」
オレの言葉に、目の前の白ネコの長いシッポがピクリとひきつった。
「私の名前は『ネコ？』ではない」
白ネコは偉そうな口調で言った。――って、あれ？　今、白ネコが――
「――しゃ、喋った！？」
白ネコのシッポがまたピクンとひきつった。
「いいか、玉村（たまむら）　海人（カイト）！　私の話ぐらいちゃんと――」
間違いない。聞き間違いじゃない。コイツ、ネコなのに喋ってる。
白ネコはペラペラと流暢に何事かを喋っているが、オレの耳はもうヤツの話なんか聞いちゃいなかった。
「ばばバケネコだぁぁぁぁっ！」
オレの口から飛び出したのは、奇妙にかすれて裏返っている叫び声。叫んだところでどうなるか、なんて考えている余裕はオレの頭にはこれっぽっちも無かった。でも、オレの叫び声は確実にアイツを呼び寄せる原因となっていたようだ。
「だーかーらーっ！」
イライラ度１００パーセントの大声。その声と共にドアの向こうからバタバタいう騒々しい足音がする。
「掃除ぐらい静かにしろってーの！　このバカイト！」
壊れそうな勢いで開くオレの部屋のドア。オレは床に座り込んだままドアへ目を向ける。
そこにいるのはやっぱり――！
「……ね、ねーちゃん……」

『バカイト』の呼び名が出た時点でわかっていたことだが、ねーちゃんのご機嫌は今、かなり悪いようだ。ちなみに、この『バカイト』という呼び名はオレには禁句。いつもなら『バカイト』と呼んだヤツとは、3日は口を聞かない。
でも今はそんなのどうでもいい！　こんな超常現象、1人じゃ手に負えないから！
「なぁ、ねーちゃん！　見てくれよ、こいつ――」
オレは小さく震える指で目の前の白ネコを指差した。
「オイ。指差すなんて失礼だろ」
白ネコはオレの人差指を睨みながら唸るように言った。
「――っ！　なぁ、聞いただろ！？」
オレは急いでねーちゃんの方に振り向いた。
目に入ったのは、驚愕の表情を浮かべたねーちゃん。それは予想通りなんだけど。なんで、ねーちゃんの眼がつり上がってんの？もしかして怒ってる？　ここは普通、驚くとこじゃないか？
そして、ねーちゃんはオレを睨み付けて怒鳴った。
「なんでネコがあんたの部屋にいるのよ！？」
……え？　ねーちゃんが気にするポイントそこだけかよ！
「あ、イヤ、確かにオレの部屋にそいつがいるのも問題なんだけどさ、ほら、もっとこう……」
「うるさい！」
オレの必死の訴えはあっさり一蹴された。
「まったく、あんたは昔っからそうなのよ！　すぐ野良猫を拾ってきて！」
ねーちゃんは、止める間もなくネコを抱え上げた。
びっくりしたのはオレと白ネコだ。待てよ！　そいつ、ただのネコじゃないんだぞ！
「コラ、女！　何をする！」
白ネコはスリムな体をよじって大暴れしている。なんとかねーちゃんの腕から逃れようとしているんだろう。

「こら、おとなしくしなさい！」
ねーちゃんはネコを一喝した。喋るネコを目の前にしてこの落ち着きよう。……オレのねーちゃんは大物なのかもしれない。
「は、放せ！」
白ネコはウナギのようにねーちゃんの腕をすり抜けた。そしてひとっ飛びでオレの膝の上に着地。オレは内心その身軽さに舌を巻いた。体操選手の演技みたいだ。
「オイ、タマ。お前覚えているだろうな？」
白ネコの顔がずいっと近づいた。まるでにらめっこをしているみたいだ。
「へ？」
オレはネコの目に映る、自分の顔を眺めながら返事をした。乱れた黒髪の奥に困ったように隠れているオレの瞳が、オレ自身に問いかける。――この白ネコ、一体何を言っているんだ？
「名前！　私の名前だ！　タマ、わかってるだろう？」
癪に障るエラそうな口調。ついでに「タマ」って呼び名もイラつく。名字が『玉村』だから『タマ』。昔、友達から呼ばれてたあだ名だが、ネコにそんな名前で呼ばれるなんて、なんか屈辱だ。
「答えろタマぁ！」
ネコの声に悲痛な色がにじむ。同時にヤツの４本の足に力がこもり――
「いってぇぇぇぇ！　オレの足ぃぃぃ！」
「おっと。つい、爪を立ててしまった」
ズボン越しだから、出血騒ぎにはなっていないようだが、爪を立てられては敵わない。床の上で悶えるオレ。そんなオレを尻目に白ネコは優雅にオレの膝から飛び降りた。
その瞬間だ。
「捕まえたっ！」
ねーちゃんの腕が再びヤツを捕獲した。
「何っ？！　くそっ！　放せというのに！」

「こら、ニャーニャーうるさい！」
ねーちゃんが白ネコに怒鳴った。
「……『ニャーニャーうるさい』？」
このセリフがきっかけだった。オレの頭が『何かがおかしい』と急に回転し始める。
あの白ネコ、「ニャー」なんて言ったか？
違う。
あの白ネコはさっきからずっと人の言葉を喋っているのだ。「放せ」と。少なくとも、オレにはそう聞こえている。
「ちょっと海人。あんたのネコでしょ。コイツ、なんとかしなさいよ」
「タマ！　オイ、ボーっとすんな！　助けろ！」
ねーちゃんと白ネコと、同時にオレに話しかけてきた。
オレはゆっくりと顔を上げ、白ネコとねーちゃんを交互に見た。

――ねーちゃん。コイツ、さっきからずっと人間の言葉を喋ってるけど、気付かないか？
――白ネコ。お前は一体何者だ？

頭の中でそれぞれに言いたいことが渦巻いている。でも、あまりにも非現実的で上手く言葉にならない。だからオレは、バカみたいに口を開いたり、閉じたりしていた。
「何なのよ、もう！」
使えないわねぇ、とかなんとかつぶやきながら、ねーちゃんは大暴れする白ネコを連れて部屋を出ていった。

おい、ねーちゃん。立つ鳥跡を濁さず、だろ？　跡が濁りすぎなんだけど？　オレ、わからないことだらけで、ぜんぜんすっきりしないんだけど？　どーすればいいんだ？
こんな状態じゃ、部屋は当分片付きそうにない。

2、腹が減っても戦は続く　（1）

空がしだいに夜の闇色に染まっていく。オレは開け放った窓の枠に腰をかけてぼんやりとそんな空を眺めていた。階段下の方からねーちゃんの声が聞こえたような気もするけど……まぁ、ほっといていいだろう。多分、あの白ネコと格闘しているんだろうな。二階のオレの部屋にまで聞こえてくるなんて。やっぱり、うるさいのはねーちゃんの方だ。

部屋は相変わらず荒れきったままだ。プリント海もガラクタ堤防も健在。いい加減片づけをしないといけないのでは、と思うけど、どうも身が入らない。

頭の動きが妙に鈍い。ちゃんと動くための歯車がいくつか欠けてるみたいだ。それもこれも、ぜーんぶあの白ネコが変な謎を残して行ったせいだ。

「海人ぉー？　晩飯だぞ――って、何してんだ？」

唐突に耳に転がり込んできた、オレの名前を呼ぶ低くて落ち着きのある声。オレはびっくりして窓枠からずり落ちそうになりながら、声の方に振り向いた。

オレの部屋の扉が開いて、長身の男が頭を覗かせる。白髪の混じり始めたストレートの黒髪がオレとそっくりだ。（もっとも、オレには白髪は混じって無いが）

「なななんだ、父さんか……」

微妙に上ずった声でオレは応えた。なんだか、秘密のヘソクリをバレる寸前で隠したような気分だ。

「『なんだ』とは何だ」

静かな夜の空みたいな父さんの黒い瞳がオレの部屋を一通り見回す。と、みるみる父さんの眉間にしわが寄っていく。ちょうど、イ

ヤな臭いをかいだ時みたいな顔だ。
「海人、お前この部屋――」
「あ、あぁ、今片づけ中なんだ」
オレはいつも以上にボソボソと言った。ねーちゃんが聞いてたら、また「ブツブツ言うな！」とか言うんだろうな。
「明日、下宿先に荷物を引っ越すのに……間に合うのか？」
「間に合わせるよ」
オレは足元のプリント海を見つめながら父さんに言い返した。父さんの同情したようなため息が聞こえる。我ながら情けなくなってきたなぁ。
「そうだ、晩飯に呼びに来たんだった。もうみんな食べ始めているかもしれんぞ、早く来いよ」
そう言って父さんは去った。
荒れきった部屋に一人になったオレ。昼間は暖かかった春の風は、日が暮れてすっかり涼しい風になっている。どこか冷たく感じるぐらいだ。
とにかく、晩飯にしよう。腹が減っては戦はできぬ。この部屋との戦いはまだまだ続きそうだし。

「やっぱりマグロはおいしいわ！」
「美波、少し食べすぎじゃないのか？」
「いーのよお父さん。食卓は戦場よ？　あ、イカだ！　これもおいしーのよね」
ちょうどオレが台所兼居間の扉に手をかけた時だ。ねーちゃんの明るい大声が聞こえる。
ってか、「おいしい」ってどういうこと？　ねーちゃん、オレを待たずに先に食べているのか？　オレ、まだ席についてないんだけど？
……これはオレの晩御飯の消滅の危機に等しい。
「くそっ！」

オレは大慌てで扉を開けた。
「あ、海人！　遅いわよ」
夕食の席に着いたオレをねーちゃんが箸でビッと指した。まるで責めてるみたいだ。
「何度呼んでも来ないなんて！　私の声、聞こえなかったの？」
「……あの声はオレを呼んでいたのか」
「え？　なんて言った？　ボソボソ言わないでよ」
「……なんでもない」
「ハイハイ、今日の夕飯はお刺身よー」
母さんはいつもより大きな声を出して仲裁に入った。母さんのこげ茶色の瞳がオレを見て苦笑いするように細くなった。
母さんは瞳の色と同じこげ茶色のゆるいウエーブのかかった髪を一つに束ねている。長さこそ違うけど、ねーちゃんの今の髪とそっくりだ。ちなみに、母さんのこの髪は地毛。「学生時代は『髪の染色は校則違反だ』って先生に怒られたのよ。黒色に染めたら何も言わなくなったけどね」と軽い調子で笑って語ったことがあった。
まぁ、オレやねーちゃんは父さん譲りの黒髪だったから、母さんみたいな苦労はしていない。でも、ねーちゃんは高校を卒業して大学に進学してから――髪を染めても怒られなくなったら――すぐに今の茶色いウエーブヘアにした。まるで、母さんとおそろいのような髪に。
こういうの、無い物ねだりっていうのかな。それとも、憧れなのかも。

オレは食卓に目を向け――思わずため息をもらした。
食卓の真ん中に鎮座する今晩のメインディッシュ。母さんの言葉通りならば、お刺身……だったんだろう。
もう魚は一切れも無いけどね！　ツマ（大根の千切り）しか残ってないんだけどね！
じゃあ、今晩のオレの晩ご飯の献立は、大根の千切り、白ご飯、

わかめスープなのか？　ねーちゃんはマグロを食べてるのに？
「なぁ、ねーちゃん。オレの刺身は……？」
オレはかすれた声でひっそりと問いかけた。
「甘いわよ海人。食卓は戦場よ？」
フフンと不敵に笑うねーちゃん。そのセリフは、非情な宣告にも等しい。このねーちゃんには、かわいい弟に夕食のメインディッシュを残してやろうという気遣いはないのか。ワサビの塊を投げつけてやりたくなる。
でも、オレはその衝動をかろうじて抑えた。代わりに、負け惜しみするように大根を口に頬張った。シャリシャリとした食感。味気ない水っぽさ。ワサビが無くても涙ぐんでくる。こんなのばっかり食ってるから、オレはヒョロイままなんだ。ねーちゃんの鬼！

2、腹が減っても戦は続く　（2）

うちの食卓では主に女性陣が会話の中心だ。オレも父さんもあんまり口数は多くない。だから自然に母さんとねーちゃんが話をして、オレと父さんが聞き役といった形になる。

「そうえば、お母さん。海人ってば野良猫を家に入れてたのよ」

「え？　野良猫？」

母さんが眉をひそめる。ねーちゃんめ、余計な告げ口を。母さんは動物が苦手なのだ。母さん、そんな顔すると小じわが増えるよ。

「だから、入れてないって。　アイツがかってに部屋に出たんだよ！」

オレは猛然と反論した。しょぼい晩御飯に加え濡れ衣まで被されるなんてあんまりだ。

話を聞いていた父さんがのんびりと口を開いた。

「『部屋に出た』って……ネコだろ？　その言い方じゃ、まるでゴキブリみたいだなぁ」

「父さん、食事中」

母さんが鋭く突っこんだ。ハイハイと面白そうに父さんが笑う。反省度ゼロだ。

「とにかく、オレは野良猫なんて拾ってない」

「そういえば、海人は昔、よく家で野良猫を飼おうとしてたわねー」

ねーちゃんが懐かしそうに言った。ダメだ。この人、オレの話を完全にスルーしている。オレは気持ちを切り替えて、少し気になっていたことを尋ねることにした。

「そういえば、ねーちゃん。あのネコどこに行ったんだ？」

「外に逃げて行ったわ。ホントは飼い主を探すか、保健所に連れてくべきなのかなぁって思ったんだけど、そこの開いている窓から逃

げちゃって」
そう言ってねーちゃんはリビングの窓を指差した。
「そうか……」
喋るネコが街に放たれたとなったら……きっと大騒ぎになるよな。しかもあの白ネコ、オレの名前を知っていたよな。もしアイツが街中でオレの名前をペラペラ喋りでもしたら……まずいことにならないか？　でも待てよ。ねーちゃんはアイツが喋ってることにすら気づいてなかったよな。ということは、別段心配するようなことは起こらない……のか？
「なに、ぼーっとしてんのよ。やっぱり気になるんだ？」
ねーちゃんがからかうように目を細めた。
「うっさい」
オレはぴしゃりと言い返すと猛然と大根をほおばる。一口頬張って、強がったことを後悔した。やっぱり水っぽくてまずかった。

大根の千切りも皿の上から消え、ねーちゃんも父さんも自室に戻っていった。でもオレはまだ食卓に居座ってた。健全な男子たるオレの夕御飯が、大根の千切りと、白ご飯と、わかめスープだなんて、あんまりだ。ねーちゃんがいなくなった今、冷蔵庫を漁ってみるのもありだろう。多分、冷凍タコ焼きぐらいあるんじゃないかな……。そんなはかない希望にすがるなんて、オレ、情けないな……。
いささか惨めな気持ちになりながら冷蔵庫のドアに手をかける。その時、横から声がかかった
「ほら海人」
母さんだ。オレに差し出したその手にあるのは、小皿に盛った刺身だ。
「これ、夕飯の……？」
「おねーちゃんには内緒よ？」
母さんのこげ茶色の瞳が明るく輝いている。まるでサプライズのプレゼントを差し出しているみたいだ。

「あ、ありがとう」
ボソボソとお礼を言って小皿を受け取る。母さんはくっくと笑いをかみ殺した。
「な、なに笑ってんだよ」
突っかかるように言うと、母さんは何でもないわ、と手を振った。
「うちは生存競争が厳しいからね」
「……ったく、早く一人暮らしがしたいよ」
オレは小声で文句を言いながら刺身をほおばった。うん、ウマい。やっぱり刺身はマグロだな。
「へぇー、一人暮らし楽しみなんだ」
唐突に盛大な水音がした。どうやら母さんが洗い物を開始したらしい。
「楽しみってほどでもないけどさ……まぁ、少なくとも、一人暮ならゆっくり食べれるだろ？　ねーちゃんに先に食べられることもないし」
派手な水音に負けないように声を張り上げてオレが言う。
確かにねぇと母さんはからかうように笑った。
「でも……こんなふうにみんなでごはん食べるのも、少なくなるのかしらねぇ」
それは水音にかき消されてしまいそうな小さい声だった。オレに言ったというより、思わず漏らしたつぶやきに等しいだろう。
でも、もしコレがオレへの問いかけだとしたら？
オレの答えは「そりゃそうだろ」だ。オレは三日後には下宿暮らしを始めるし、ねーちゃんだってそのうち自立するか結婚するかして（嫁の貰い手がいれば、だが）、家を出るかもしれない。
だけど、おれは「そうだ」なんて言えなかった。母さんのその声が、その表情が、なんだかいつもよりか細くて寂しげに聞こえたせいだ。
「……まぁ、すぐ帰ってこれるさ。下宿っても隣の県だし」
少し考えて、オレはそう返事をした。

「そうね。電車で2時間あれば行けるからねぇ」
母さんは笑った。多分、洗い物の水しぶきのせいだろう。母さんの眼がいつもよりキラキラしてたように見えたのは。

3、隣の海は闇色　（1）

「海人ぉー、こっちは片付いたぞ」
流しの方から父さんの間延びした声が聞こえる。
「あー……うん、そう」
オレは中途半端な返事をしながら、洋服の入った段ボール箱をそのままクローゼットの中に放り込んだ。本当はちゃんと服をケースに入れて整理するべきなんだろうが……こうした方が時間短縮になる。
あたふたとクローゼットの扉を閉めたと同時に、父さんが近づいてきた。
「やっぱり、家具付きの部屋だから引っ越しも楽でいいな」
一通り部屋の中を眺めて父さんが言う。どうやらオレのずさんな片付け方法はバレてないらしい。オレはこっそり安堵のため息をついた。
「なかなかいい部屋じゃないか」
父さんが満足そうにうなずいている。
「いい部屋、ね……」
ボソリと呟き、オレは下宿先の部屋を見回した。
たった一部屋の狭い住まい。実家のオレの部屋に、申し訳程度の玄関と、簡単な水周りのスペースが増設されたぐらいの広さだ。まぁ、学生アパートの広さなんてこんなもんか。
部屋には、ちらほらと小さめな家具が置いてある。冷たく光る白い冷蔵庫。ちょっと固そうなベッド。どれもこれも、見慣れない家具ばかりだ。家具付きの部屋を借りたのだから、これは当然の光景だといえる。でも、目の前にあるこの見慣れない家具を、これからオレが使っていくのだと考えると、妙な違和感がある。

実家から持ってきた家具は、食卓代わりの小机や小さい本棚ぐらいだ。見慣れた小さな家具たちは、こじゃれた部屋の中で所在なさげに浮いて見えた。
「オレ、これからここに一人暮らしするんだよな……」
オレは鼻をこすりながら、ぼそりとつぶやいた。妙に部屋の匂いが気になる。他人の家に来たような気分だ。
「何を今さら」
独り言のつもりだったのに、父さんには聞こえていたらしい。あけっぴろげに笑われてしまった。おい、父さん。そんなに笑うことないだろ。
どうやらオレのこぼした文句は、父さんには聞こえなかったらしい。
「海人！　こっち来てみろ！」
オレの不機嫌オーラをまるで無視した、父さんの明るい声。窓際で、父さんが手招きしている。その弾んだ声も笑顔も、まるで宝物を見つけた子供みたいだ。
オレは鼻をこすりながら、のそのそと父さんの隣へ行く。
「何？」
「海人、お前の大学が見えるぞ」
オレはチラリと窓を眺めた。父さんが指差す先で、大学の建物の、とんがった屋根が茜色に輝いている。目がチクチクするぐらい眩しくて、オレはすぐ目を逸らした。
「こんなに大学と近いなんていいじゃないか。ますますいいアパートだなぁ」
勤務先もこれぐらい近いといいのに、なんてぼやいている父さんは、当たりくじでも引いたみたいに喜んでいる。自分が住むわけじゃないのに、オレより嬉しそうだ。他の人の物って無条件でよく見えるものなんだろう。隣の芝は青いってわけか。
「どうだ、海人。部屋の片づけも終わったし、ついでに大学に寄ってみるか？」

「いいよ……どうせこれから毎日みるってのに。それより、もう家に帰ろう」
父さんの眉が垂れて、あからさまに残念そうに唸った。
「ほんとに家に帰るのか？　父さんはともかく、海人はこのままここに泊ることもできるだろ？」
「帰るよ。明日はクラスの同窓会があるんだ。そもそも、今日引っ越しした理由は、父さんの仕事の都合に合わせただけなんだし」
「そうか……」
父さんはもう一度だけ大学を眺めた。夕日に照らされた父さんの横顔には、温かい茜色の光と黒々とした影が同居していた。
オレは唐突に思った。父さんはオレよりずっと歳をとってる人間なのだ、と。父さんに文句いったり、ブツブツ言ったりしてるけど、なんだか急に父さんが遠くにいる気がした。
「父さん……？」
小さくてか細いオレの呼び掛け。相手がねーちゃんなら独り言として、完全無視されていたかも。それでも父さんにはちゃんと届いていたみたいだ。
「よし、じゃ海人。帰るか」
振り向いてオレの目を見る父さんの笑顔は、茜色に輝いて見えた。

3、隣の海は闇色　（2）

空は茜色から群青色に変わっていた。気の早い星がちらほらと顔をのぞかせている。

オレと父さんの乗った車は、下宿先の街――美原（びはら）市を後にして、実家のある街――久楽（くら）市を目指して、上り坂の太い道路を走っていた。

「下宿先、いい街じゃないか」

父さんは運転しながら、助手席のオレに話しかける。　オレは窓から美原の街を眺めていた。街の灯りがギラギラしてまぶしい。光の1粒1粒がそれぞれ勝手に自己主張しているみたいだ。

ここがオレの住む街、か。

「父さんはこの街のどこがいいんだ？」

「海が近いとこ」

即答だった。確かに、この街は山を隔ててすぐに海がある。まったく、釣り好きの父さんらしい答えだ。父さん、特に海釣りが好きだもんな。

「海人。お前はどうだ？　この街、好きか？」

父さんが問いかけると同時に、車はトンネルの中に突入した。車内で流れていたラジオが急に途切れて耳障りな音を立てる。

「オレは別に。父さんほどの釣り好きじゃないし」

「そういえば、最近は釣りに行く暇もなかったな。今度、美原（こっち）に来るときは釣りの準備も持っていこうか」

「それでそのまま下宿先のアパートで泊まるってか？」

「お。いいな、そのプラン」

父さんはまんざらでもなさそうだ。でも、オレにはあまり嬉しくないプランだぞ、それ。釣り帰りの父さんがその日の収穫を引っ提げて、下宿先のアパートへやってくる……。友達には絶対見られた

くない光景だ。それに、部屋が魚臭くなりそうじゃないか？　魚料理は好きだけど、部屋の匂いにするほど好きってわけじゃないのだ。
どうやって反論するべきか考えていると、トンネルが終わった。ラジオがぎこちなく喋り始める。
「おぉ、海だぞ海人！」
道路は下り坂にさしかかっていた。父さんに促されるまま目をあげると、フロントガラスいっぱいに広がる海が目に入る。
「やっぱり海はいいなぁ」
感慨深げな父さん。オレは思わず父さんの顔を見た。父さんはこの海がいいというのか？
「オレ、この海はあんまり好きじゃない」
そうつぶやいたオレの口調は自分が思っていたより頑なだった。ちょうど聞き分けのない子供のような、強情な口調。
「海人……？」
運転中の父さんが、一瞬だけこっちを向いた。父さんの黒い瞳の中に驚いたような、気遣うような、光が見える。
「えっと、オレはこの海より地元の――久楽の海の方がいいんだよ。ほら、オレが小さい時、よく父さんと釣りに行っただろ……あの海の方が好きだ」
「そうか？　でも、美原の海も久楽の海も、同じ1つの海だぞ。つながっているからな」
それはそうだろう。地図で見たら、久楽の街も美原の街も同じ海に面しているのだから。
だけど、オレは――
「オレは久楽の海の方がいい」
小さく、それでいて強情な反論がオレの口からこぼれた。父さんに聞こえたかどうかはわからない。でも、父さんは何も言わなかった。
オレはもう1度窓の外に目を向けた。
2度目に見ても、車窓から見える美原の海は闇色だった。日の暮

れた空よりも、暗くて深い闇色の海。ずっと見ていたら飲み込まれてしまいそうになる。
何かを振り払うかのようにオレは眼を閉じた。こんな色の海なんて見たくない。
頭の隅で父さんの言葉がよみがえった。
『美原の海も久楽の海も同じ1つの海だぞ。つながっているからな』
「……違う」
オレはこっそり反論した。
眼の前に広がる闇色の美原の海。オレの記憶の中の久楽の海。やっぱり違う。小さい時、よく父さんと一緒に釣りをした久楽の海とは違う。明るく輝きながら、ずっと遠くまで広がっていた久楽の海とは全然違う。
たとえ同じ海でも、たとえ海はつながっていても――
「――オレには別の海にみえたんだ」
オレには闇色に見える美原の海を、父さんは「いいなぁ」と言った。
父さんの眼に、この海は何色に見えたんだろう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8080y/

人生《ストーリー》は終わらないっ！　　1

2012年1月6日11時48分発行